

今 治 明 徳 高 等 学 校

平成十九年度

学力検査

国 語 問 題

— 矢田分校入試 —

* 解答は、すべて別紙解答用紙の該当欄に記入しなさい。

受 検 番 号

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。ただし、設問の都合上、省略した箇所があります。

四十代もなかば近くになってはじめて、研究とは読書のことだと気づいた。それまでは、考えること、書くことのほうが大切だと思っていたのである。勉強するということ、研究するということは、要するに読書するということである。誤解をまねくおそれがあつても、いまはそう言い切りたい気がする。読書は大切だ。より多くの本を、より速く、よりの確に読み進んでゆくことは決定的に大切だ。何のために？ もちろんこの世界をより深く理解するためにである。

こんな野暮なことをあえて書くのは、もっと早く気づいていれば違っていたのという悔恨にも似た気持ちがあるからだ。若かつたころにそんな助言をしてくれる人がいたならどんなに良かっただろう。もしいたなら、読書には年齢というものがあつて、人生の時期によって読書の方法もまた違ってくるということも教えてくれたに違いないのだ。 A、十代でなければできないこ

とがある。語学や古典の学習、あるいは音楽、舞踊といった稽古事だ。要するに体で覚えなければならぬことである。これは純粹に生理的な問題であつて、脳の年齢は二十歳をさかいにゆつくりと衰えはじめる。十代に暗記したことはいつまでも忘れないが、五十代に暗記したことはもう忘れていく。いや、そもそも暗記などできないのだ。判断はできる。決断もできる。だが、記憶力、計算力は確実に落ちていく。だれでも経験することだ。

だれでもが経験することなら、その事実を若者に知らせしておくべきだろう。そう思つて知らせようとする人間がいないわけではない。① 自分がいまだれほど特権的な時期にいるのか、十代の人間には理解できない。当然である。親の忠告に耳を傾ける子はいまでは珍しい。教師の忠告に耳を傾ける学生も珍しい。こうして、上の世代の体験がただの無意味に捨てられてゆく。年老いたもの

の目からみれば暗記は十代に行うのがもつとも効率がよい。 I ということである。

古来、稽古事は、七歳前後からはじめるのが良いとされるが、これには生理的な根拠がある。脳も体も柔らかいからである。歌舞音曲のたぐいだけではない。たとえ(注1)論語(注2)の素読にしてもそうだ。素読というが、読むというよりはむしろ暗記するのだ。意味などどうでもよい。暗記すること、そのために繰り返し音読すること。つまり、頭ではなく耳と口、要するに体で古典を覚えることである。これを野蛮といつてはならない。 B 文明であつて、かえつて七歳の児童に自分自身の考えを要求するほうがよほど野蛮なのである。前者は、年齢を重ねたものの経験に基づくが、後者はたんに人間かくあるべしという理念に基づくにすぎない。経験に学んでいるのは前者であつて、後者はむしろ時代の流行、時代の狂信に流されているのである。

意味を無視してただ暗記させるのは非人間的だと主張するものは、自身の体験を思い出してみるのがいい。古典を一読していったいどれだけよく理解しえたか。年を経て(注3)片言隻句を思い出し、読み直して、ああそうだったのかと気づくのが読書というものなのである。意味を支えるのは人生経験の厚み以外ではない。 (a)

外国語の習得もまた同じ流儀でなされるのだ。すなわち(注4)テキスト一冊丸暗記すること。トロヤ発掘で有名なシュリーマンは外国語習得にひいでていたことでも有名だが、「古代への情熱」にその秘訣——シュリーマンによれば「簡単な方法」——が記されている。それは「非常に多く音読すること、決して翻訳しないこと、毎日一時間あてること、つねに興味がある対象について作文を書くこと、これを教師の指導によつて訂正すること、前日直されたものを暗記して、次の時間に暗唱すること」である。これもまたひとつの読書なのだ。(b)

シュリーマンの読書がもしも間違つていたとすれば、それは年齢だけだ。彼は十代にそうすべきだったのである。 C 、彼自身もそれは重々承知していた。十代の彼にはそれだけの余裕がなかったのである。だが、中年になつて余裕を得るやいなや、こ

の Ⅱ 凡な男は果敢にも十代の読書を実行した。(c)

③ (注6) ようてい

十代の読書の要諦は暗記にあり、それに値する書物を見出すことにある。もちろん、子供に判断できるわけがない、大人にだって怪しいものだ。幸い古典というものがある。思い出して役立つ確率もつとも高いのが古典である。これは自国語にしても外国語にとつても同じことだ。暗唱して役立つ詩や文章は外国語にだってたくさんある。(d) (三浦雅士『読書と年齢』による)

(注1) 論語……………孔子の言行、弟子との問答などを編集した本。

(注2) 素読……………意味は考えず、文章を声に出して読むこと。

(注3) 片言隻句……………わずかな言葉。「へんげんせきく」とも言う。

(注4) テキスト……………テキスト。

(注5) シュリーマン……………ドイツの考古学者(一八二二～一八九〇)

(注6) 要諦……………要点。肝心なところ。

問一 A・B・Cに入る最も適当な語句を、次のア～エの中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア たとえば イ もちろん ウ つまり エ むしろ

問二 Iに入る最も適当な言葉を、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「鉄は熱いうちに打て」

イ 「温故知新」

ウ 「急がば回れ」

エ 「螢雪の功」

オ 「先ず隗わいより始めよ」

問三 Ⅱに入る適当な文字を、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 無 イ 未 ウ 不 エ 非 オ 平

問四 本文には次の一文が脱落しています。どこに入れたらいいか、最も適当な箇所を、本文中の a～d から一つ選び、記号で答えなさい。

それが学習の早道であることを的確に見抜いていたのだ。

問五 Ⅱ線部 a 「前者」、b 「後者」の指し示す内容をそれぞれ a は八字、b は十八字で本文中から抜き出して答えなさい。

問六 Ⅰ線部①「自分がいまだそれほど特権的な時期にいるのか、十代の人間には理解できない」のはなぜですか。その理由として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 若者は判断力や理解力が劣っているから。

イ 若者は自分の将来に希望がもてないから。

ウ 若者は指導的立場に選ばれることはないから。

エ 若者は記憶力などの衰えの経験がないから。

オ 若者は読書量がそれほど多くはないから。

問七 Ⅰ線部②「意味を支えるのは人生経験の厚み以外ではない」とはどういうことですか。最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 多様な人生経験が外国文学や日本の古典文学の正しい理解の基本になるということ。

イ 人生経験が豊富なので、古典に使われる言葉の美しさを理解できるということ。

ウ 若いころ暗記したことが、人生経験をつむことによって理解できるようになるということ。

エ 片言隻句の正確な意味を理解するには、豊富な人生経験を必要としないということ。

オ 人生経験を積むことによって次第に古典文学を大切にできるようになるということ。

問八 ——— 線部③「十代の読書の要諦は暗記ようていにあり」とはどういうことですか。最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選

び、記号で答えなさい。

ア 十代には、内容を理解できるまで何度も繰り返し読む読書法が大切であるということ。

イ 十代には、書かれている内容を正確にまとめて人生の指標とする読書法が大切だということ。

ウ 十代には、書物に書かれていることをひたすら暗記するという読書法が大切だということ。

エ 十代には興味のある書物を毎日一時間以上読むような読書法が大切だということ。

オ 十代には、勉強すること、研究することに共通するような読書法が大切だということ。

問九 本文の趣旨に合致するものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 本国語でも外国語でも、十代の若者が暗唱して役立つのは詩や文章である。

イ トロヤ発掘で有名なシュリーマンは、三十代で十代にすべき読書法をしたので間違っている。

ウ 四十代も半ば近くになると考えることや書くことよりも読書のほうが大切になってくる。

エ どのような言葉でも、古典は子供が暗唱して役に立つ確率が最も高い書物である。

オ 頭ではなく、耳と口で繰り返し音読することは野蛮であり、時代の狂信に流されている。

二 次の①～⑤の各文の——線の部分の読み方を平仮名で答えなさい。

- ① 新たな事業を企てる。
- ② 生活を省みる。
- ③ 科学の画期的な発明発見。
- ④ 偶然の恩恵を生かす。
- ⑤ 山の中で伐採した木。

三 次の①～⑤の各文の——線の部分を漢字で答えなさい。ただし、必要なものには送り仮名をつけること。

- ① 十分の一ほどにチヂム。
- ② 荷物をアズケル。
- ③ 駅までオウフクする。
- ④ ギヨウセキをあげる。
- ⑤ けが人をカンゴする。

四 次の文章は、竹内真『自転車少年記』の一節である。自転車好きの草太と昇平は幼なじみである。小学四年生になり、ちょうど同じ時期に新しい自転車を買ってもらった二人は自転車で行けるか試すために海へ行くことにした。本文はその帰り道の場面である。これを読んで、後の問いに答えなさい。

右脚のふくらはぎに違和感を覚えたのは、急な坂道を登り始めた直後のことだった。

そのあたりが突っ張るような、筋肉が固く強張こわばっていくような感覚だった。草太は驚いてブレーキをかけ、坂の途中で地面に足をつけてしまった。

「…………？」

自分の脚を見やり、何度か回したり軽く叩いたりしてみる。やがてふくらはぎの違和感は消えていったが、代わりに頭の中に不安感が **I** を下ろしてしまった。

こんな長い距離を走るのは初めてなのだ。さんざん走ったり海に入ったりして負担をかけたせいで、脚がどうにかなってしまつたのかもしれない。こんな脚で本当に帰り着けるのか、急aに心配になつてきた。

なにしろ風ヶ丘までの道のりはまだ半分以上残つている。登り坂はまだ続くし、疲れも増してきている。さつきから少し頭まで痛くなつてきていた。

草太がそんなことを考えている間にも、昇平は (A) 先に進んでいた。蛇行しながら坂道を登っていき、もう坂の頂上にまで達しようとしている。

対向車線でハンドルを切つた時、昇平がこっちを向いていた。草太が止まっているのに気づき、道の真ん中でブレーキをかけている。

「ソータ、どうしたー？」

大声で尋ねてくる昇平の息も乱れていた。こっちに向かつて身を乗り出し、今にも坂を下つてきそうな格好になっている。

草太は慌てて首を振つた。(B) 登つた昇平に、また坂を下らせては悪いと思つたのだ。昇平も疲れているのだから、自分

も負けてはいられない。

昇平の質問に答える代わりに、草太は再びペダルをこぎ始めた。残った力を振り絞り、なんとか昇平に追いつこうと走っていた。

「ソータ、本当に大丈夫か？」

「ちょっと脚が疲れただけだつてば。全然平気だよ。」

再び二人で走り出してからは昇平が後ろを走った。またさつきみたいに二人の差が開いたりしないように、疲れている草太が先に行くことになったのである。

つまり後ろから昇平に見守られる格好なわけで、草太としては複雑な気分だった。その方が安心なのは確かだけれど、昇平のお荷物になっているようで悔しかったのである。

その坂を越えた後は疲れなど感じさせないように頑張った。下り坂から平地にかけてはスピードを上げ、わざと重たいギアを踏んで走っていった。

しかし、草太の頑張りも長くは続かなかった。やがて脚の疲労が限界に達してしまったのだ。

長く平地が続いた後、前の方に登り坂が見えてきたところだった。きつそうな坂の勾配(注②)に思わずため息をついた時、草太の脚に異変が起きた。

ふくらはぎに、突然鋭い痛みが走った。筋肉がぎゅつと硬直し、右脚が自分のものじゃなくなったように感じた。

その感覚に驚いてるうちに、脚の筋肉がびくびくと痙攣けいれんし始めた。それと共に痛みも増し、目の前が一瞬真っ白になる。

こむら返りとか、足がつるとかいう言葉は知っていた。しかし、自分の身に起きるのは初めての経験で、草太は頭の中がパニッ

クになってしまった。

これ以上ペダルを踏んではいけないような気がした。慌ててブレーキをかけ、道の脇で止まろうとしたので、バランスを失って、自転車ごと倒れてしまった。

「ソーター！」

後ろから昇平の悲鳴のような声が聞こえた。

気がついたら、涙が出ていた。

転んだ時にできたのはかすり傷程度だったし、自転車が壊れたわけでもない。昇平に教わって足の親指を引っ張っているうちに脚の痙攣も収まったが、涙だけはどうしても止まらなかった。

悔しかった。鈍い痛みが残る右脚が、立ち上がる^bとしても力の入らない全身が、(C)悔しくて仕方なかった。

昇平はまだ走れるのに、海に行こうと言い出した自分が走れないのが情けなかった。

③「大丈夫だって、泣くなよ。ちよつと休憩してから出発すれば、またちゃんと走れるようになるからさ」

昇平が慰めてくれたが、余計に涙が出てきただけだった。これを飲めば元気が出ると差し出されたスポーツドリンクの水筒も、首を振って断った。

しゃくりあげながら、自分のリュックを開いた。残り少なくなった麦茶の水筒に直接口をつけ、中身を一気に喉のどに流し込む。

口の横から麦茶がこぼれ、Tシャツの胸を濡らした。顔も涙と鼻水で濡れていたし、汗もしたたり落ちてくる。腕でいくら拭ぬぐっても、草太の顔はぐしゃぐしゃになったままだった。

そんな草太を、昇平はただ困ったように見つめている。一瞬目が合い、草太は涙を拭いながら顔を伏せた。

「……もう、走れないよ」

小さく呟いた。口に出してそう言った途端、また涙が溢れてきた。

「走れないって……」

昇平が言った。途方にくれたような声だった。

そのまましばらく、二人とも黙っていた。草太は何も言う気になれなかったし、昇平は何と言っているかわからないようだった。

やがて、昇平が毅然とした声で口を開いた。

「泣くな！」

④ 草太を怒鳴り飛ばすような声だった。草太が驚いて顔を上げると、急に優しい声になって告げてくる。

「もう走れないんだったら、俺んちに電話して迎えに来てもらおうぜ。うちの父さん、今日は家でごろごろしてるはずだからさ。

——な？」

「……」

最後の問い掛けに、草太は少し考えてから頷いた。もう自転車をこぐ力は残ってなかったし、自分で走れないなら大人に迎えに来てもらうより仕方ないのだ。

「じゃあ俺、近くの電話ボックス探してかけてくるからさ。——ソータは、絶対ここから動くなよ。」

そう言い残し、昇平が自転車にまたがって走っていく。——その後ろ姿が涙に滲みかけたが、草太はなんとか泣くのをこらえて

Ⅱ を食いしばった。

(注1) 風ヶ丘……草太と昇平が住んでいる団地。

(注2) 勾配……傾き。

問一 I・II に当てはまる語を、それぞれ漢字一字で答えなさい。

問二 (A) (C) に当てはまる語句を、次のア～オの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア ただ イ さも ウ せつかく エ おそらく オ どんどん

問三 線部 a、c の品詞名を、それぞれ漢字で答えなさい。

問四 線部①「そんなこと」が指している内容を本文中から抜き出し、初めと終わりの五字を答えなさい。

問五 線部②「わざと重たいギアを踏んで走っていった。」とあるが、草太がこのような行動をとったのはなぜですか。「か

ら。」に続く形で本文中から二十字以内で抜き出して答えなさい。

問六 線部③「昇平が慰めてくれたが、余計に涙が出てきただけだった」とあるが、その理由として最も適当なものを、次

の A～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア いつもは厳しいはずの昇平から優しい言葉をかけられて、昇平との絆きずなを感じることができたから。

イ 絶対に負けたくなかったから特訓をしてきたのに、昇平との体力の差がさらに広がっていたから。

ウ 走れなくなってしまううえに、昇平から慰められている自分ますます情けなく思われたから。

エ 昇平の優しい言葉を聞いているうちに、実は昇平が勝ち誇っていることがはつきりとわかったから。

オ 自分から言い出した勝負に負けただけで、相手から情けをかけられている自分が許せなかったから。

問七

——線部④「草太を怒鳴り飛ばすような声だった。草太が驚いて顔を上げると、急に優しい声になって告げてくる」とあるが、「怒鳴り飛ばすような声」と「優しい声」に込められた昇平の心情として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 泣いている草太を何とか励まそうとする思いと、心の底から草太を心配する思いやり。

イ 泣いてばかりいる草太に対するいらだちと、草太を泣かせたのは自分だという自責の念。

ウ 草太に何もしてやれない自分に対する怒りと、草太を自分の弟のように心配する優しさ。

エ 怒鳴ることで草太を発奮させようという思いと、それがうまくいったことに対する満足感。

オ 自分も泣きたいことを隠そうと強がる気持ちと、草太にそれを気づかれないという思い。

問八

本文における草太と昇平の関係の説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 草太は昇平に対しライバル意識を抱いているが、昇平は草太を子分のような存在にしか思っていない。

イ いつも自分に対して余裕のある態度で接する昇平を意識するあまり、草太は素直に接することができない。

ウ 常にライバルとして競い合うことによって成長し続けていることを、実際は二人とも誇らしく思っている。

エ いつも相手のことを気にかけて思いやりながら行動しており、かけがえのない親友として大切に思っている。

オ 常に意地を張ってしまい素直になれない部分を感じながらも、相手のことを大切な仲間だと信頼し合っている。

【五】 次の古文を読んで、後の問いに答えなさい。

年のくれに、浅草寺のあたりに市といふことありて、(特に)ことに人おほくいづるなり。①ある人、さつまの国より、あはびの貝おほく②かひもとめて来けり。その貝の穴をふたぎ、木もてふたをつくりて、その市にてうらんとはかりけるが、折さ節障ることあれば、人アにたのみて、「ひるつかたには来るべし、それまでにうり給へ」といふにぞ、もて出でうるに、かへりイみる人もなし。さればよ、かうやうのもの、此市にてうりし例ななきを、えうなき事に時つひやすものかなとおもひつつ、いかにうれども、買ふものなれば、ゆきウきの人の袖ひかへて、「これめ(食させ給へ」などといふに、ひきはなちてゆくめり。ひる過エるころ、かの人来たりて、「いかに」ととへば、「かく」といふ。「何といひてうりし」といへば、「別になにとかいはん。貝やきの貝めさせ給へとて、うりし」とことオふ。かれ、ほほゑみて、「わがうるを見給へや」とて、いと声だかに、「はやなべ、はやなべ」といへば、過ぎ行くものは立ちかへりて買ひ求め、そこら行く人も、声をとめて買ひぬ。見るがうちにおほくの貝を、みなうりけり。此の市は人おほく出れば、ことカにかまびすして、しづかに心とむるものもなければ、手桶キうるものは、「さわら、さわら」といふ。「さわらの木もて、つくりし手桶よ」とはいふ暇キもなく、きくひまもなしとかや。物の勢キひといふものも、またことわりの外なるものなりけり。(理屈では説明できない)

〔花月草紙〕による

問一 — 線部①「ある人」と同じ人物を示す語句を、本文中の〳〵部ア〜カの中から二つ選び、記号で答えなさい。

問二 — 線部②「さつまの国」とは今の何県にあたりますか、最も適切なものを、次のア〜オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 和歌山県 イ 山口県 ウ 鳥取県 エ 熊本県 オ 鹿児島県

問三

——線部③「おほくかひもとめて」・⑤「かうやうのもの」の歴史的仮名遣いを現代仮名遣いにそれぞれ改めなさい。

問四

——線部④「折節障ることあれば」・⑥「えうなき事」・⑦「ことにかまびすして」の現代語訳として最も適切なものを、

次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ④
- | | |
|---|-----------------------|
| ア | ちようどその時、都合のいいことがあったので |
| イ | ちようどその時、都合の悪いことがあったので |
| ウ | ちようどその時、貝に触る人がいたので |
| エ | ちようどその時、貝を盗む人がいたので |
| オ | ちようどその時、激しく雨が降ってきたので |
- ⑥
- | | |
|---|---------|
| ア | おもしろいこと |
| イ | 寂しいこと |
| ウ | むだなこと |
| エ | 魅力的なこと |
| オ | 不吉なこと |

- ⑦
- | | |
|---|----------|
| ア | 特に静かで |
| イ | 特に穏やかで |
| ウ | 特にゆとりがあり |
| エ | 特に悲しくて |
| オ | 特にうるさくて |

問五

売り手にとって大切なものを本文中から五字以内で抜き出しなさい。